

いぶき 19号平成24年8月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第18回：ポール・クローデル（1868～1955年）

「私がどうしても滅びてほしくない一つの民族があります。それは日本人です。あれほど古い文明をそのままに今に伝えている民族は他にありません。日本の近代における発展、それは大変目覚しいけれども、私にとっては不思議ではありません。日本は太古から文明を積み重ねてきたからこそ、明治になって急に欧米の文化を輸入しても発展したのです。どの民族もこれだけの急な発展をするだけの資格はありません。しかし、日本にはその資格があるのです。古くから文明を積み上げてきたからこそ資格があるのです。」

（出典不明：『[http://pitanpitan.at.webry.info/201101/rticle\\_5.html](http://pitanpitan.at.webry.info/201101/rticle_5.html)』から引用）

フランスの劇作家で詩人のクローデルは、大学入学資格を得るための統一国家試験であるバカロレアに合格して級友のロマン・ロランと文学に親しむようになり、パリ大学法学部に進学後もランボーやマラルメらの影響で詩作や戯曲の創作をおこなっています。その後、外交官試験に主席で合格し、1921年（大正10年）から5年9ヶ月に渡って在日フランス大使として日本で過ごしています。彫刻家の姉カミーユ・クローデルはロダンの弟子で、彼女からジャポニズムのはしりである歌麿、北斎、広重らの高い芸術性に惹かれ、日本赴任中は、能、歌舞伎、文楽などを嗜み、時間を見つけては京都や奈良を訪れていたようです。冒頭の言葉は、1943年（昭和18年）の秋、パリのとある夜会に招かれた際にクローデルが述べたものです。このスピーチの最後に、クローデルはひと言次のように付け加えています。

「彼らは貧しい。しかし高貴である。」

今の日本人は金銭的に豊かになるにつれ、高貴さを急速に失っていつている様でなりません。先日「いぶき」で紹介のあった『日本人の誇り』の著者である藤原政彦先生も、前著『国家の品格』の最後のページをクローデルのこの言葉を引用して締めくくっておられます。どんな時代になろうとも、日本人としての誇りや品格を失うことなく、清明正直に生きていきたいものだと思います。（M. I）